



戦地に残されたシリアの人びとに援助を届けて

スワジランド HIVから子どもを守れ

南スーダン 紛争から逃れて9万人が消息不明に
ソマリアからの撤退、苦渋の決断
派遣スタッフの声(南スーダン)

特定非営利活動法人 国境なき医師団日本

寄付や『REACT』に関するお問い合わせ

0120-999-199 (9:00~19:00 無休)

〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 早稲田SIAビル3階

Tel: 03-5286-6123 (代表)

www.msf.or.jp

『REACT(リアクト)』は国境なき医師団(MSF)日本が発行するニュースレターです。MSFが活動現場で目撃する世界の人道危機と、命を救うための人道援助活動についてお伝えし、ともに考えていただくための情報をお届けします。

国境なき医師団は、1971年にフランスで設立された、非営利で国際的な民間の医療・人道援助団体です。危機に瀕した人びとの緊急医療援助を主な目的とし、医師、看護師をはじめとする約6000人の海外派遣スタッフと、約3万人の現地スタッフが、72の国と地域で活動しています(2012年度)。

国境なき医師団日本 刊行書籍のご案内

- 全国の書店やオンライン書店(amazon、楽天ブックス、HMVなど)で発売中。
- どちらの本も売り上げの一部が国境なき医師団の活動に使われます。



「日本に帰ったら、少しでも多くの人にこの現状を伝えてください。世界のどこかで私たちのことを考えてくれている人がいると思うと、励まされます」……避難民キャンプを営つ日にかけられたその言葉が忘れられない。(菅原美紗・内科医)

日本のスタッフの経験が本になりました。

『妹は3歳、村にお医者さんがいてくれたなら。』
～わたしたちが900万人の人びとに医療を届けるわけ～

定価 1,470円(税込) 国境なき医師団日本[編著] 合同出版

紛争、自然災害、貧困……世界にはさまざまな理由で必要な医療を受けられない人びとがいる。国境なき医師団日本のスタッフが自らの経験をもとに、世界の人道危機の状況と医療援助の現実を伝える本ができました。命をつなぐ医療をみんなが受けられるようにするため、なにができるのか? 中高生以上を対象に、人道援助の現場をわかりやすく伝える一冊です。ぜひ周囲の方にも、ご紹介ください。

合同出版にも
直接お申し込みいただけます。

Fax: 03-3294-3509

※まとめてご注文の場合は書籍定価から下記のとおり割引になります。
●11~20冊/1割引 ●21~99冊/2割引 ●100冊以上/3割引
※この注文票でお申し込みの場合、送料は無料です。
※お支払いは同封の郵便振替用紙をお願いします。

『妹は3歳、村にお医者さんがいてくれたなら。』		ご購入数	冊
宛先			
お名前		電話番号	
		()	

お電話でもお申し込みいただけます。合同出版 Tel: 03-3294-3507

既刊



さらに深く考えたい方におすすめ。

『人道的交渉の現場から
国境なき医師団の葛藤と選択』

定価 1,500円(税込)

クレール・マゴン、ミカエル・ノイマン、ファブリス・ワイズマン[編著] 小学館スクウェア

“人道援助の空間”の理想と現実、特に困難な活動地での交渉過程をつまびらかにした記録。援助を必要とする人びとのもとに赴くために、どれだけの代償を払う必要があるのか? 重い問いを投げかける内容です。

PRESENT

下のアンケートにご協力いただいた方の中から抽選で各一人様にご紹介した書籍を差し上げます。

アンケートのお願い

国境なき医師団の活動地の状況と活動内容をよりわかりやすくお伝えするために、ぜひアンケートにご協力ください。郵送またはウェブサイトから、ご回答いただけます。アンケートにご協力いただいた方の中から抽選で上に紹介した書籍各1冊を計2名様に差し上げます。

郵送 郵便はがきに、ご住所、お名前、年齢、職業、アンケートの回答をご記入のうえ、左記の住所までお送りください。2014年2月末日消印有効
宛先 国境なき医師団日本・広報部宛

Web トップページ → MSF図書館 → 『REACT』 2014年2月末日まで受付

※お寄せいただいた個人情報はアンケート分析にのみ利用いたします。

◎次の①~④には[ア そう思う イ そう思わない ウ どちらともいえない]から選択して、⑤⑥には自由回答でお答えください。

- ①世界の人道危機や医療ニーズへの理解は深まりましたか。
- ②MSFの活動への理解は深まりましたか。
- ③MSFや派遣スタッフを身近に感じることができましたか。
- ④今後もMSFを支援していこうと思いますか。
- ⑤特に印象に残った記事を2つ教えてください。
- ⑥ご意見・ご感想を自由にお聞かせください。

国境なき医師団日本 新事務局長就任

2013年9月12日、国境なき医師団(MSF)日本事務局の責任者である事務局長が交代し、新たにジェレミ・ボダンが就任いたしました。



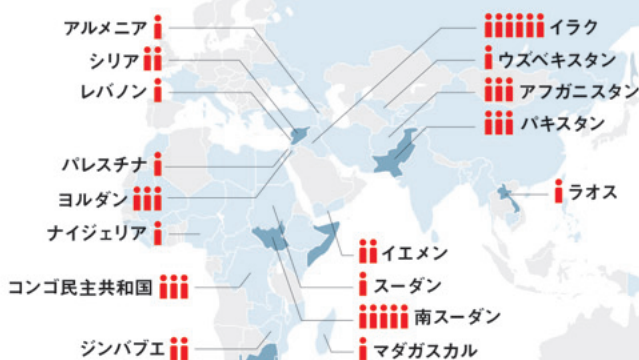
「日本事務局は開設から20年あまりで、援助人材の輩出、堅牢な財務体制、そして医療・人道援助団体としての信頼を確立してきました。今後も多くの命を救う役割を果たすため、日本から世界中の活動に貢献できるよう努力してまいります」

2013. 12 CONTENTS

ACTIVITY NEWS

- シリア
- 4 戦地に残された人びとに
援助を届けて
- 南アフリカ共和国
- 6 超多剤耐性結核に打ち勝って
- スワジランド
- 7 HIVから子どもを守れ
- パキスタン **IN FOCUS**
- 8 「現地から日本の皆さんへの
メッセージです」
- ソマリア
- 10 ソマリアからの撤退、苦渋の決断
- 南スーダン
- 12 紛争から逃れて
9万人が消息不明に
- VOICE 派遣スタッフの声
- 11 小林さより (小児科医/南スーダン)
- Field Stories** フィールド・ストーリーズ
- 13 松本 卓朗 (ロジスティシャン/ラオス)
白川 優子 (看護師/シリア)
- 14 支援者の声

■ 今号掲載国
■ 国境なき医師団の活動国・地域
■ MSF日本からの派遣者数(17ヵ国・37人/2013年10月31日現在)



<写真>

表紙：シリア北部でMSFが運営する病院で、やけどを負った子どもの治療にあたる白川優子看護師(写真右)。P.2-3：シリア北部、養鶏場の跡地を利用したMSFの仮設病院で。エアーテントの手術室は滅菌状態を確保するための工夫。

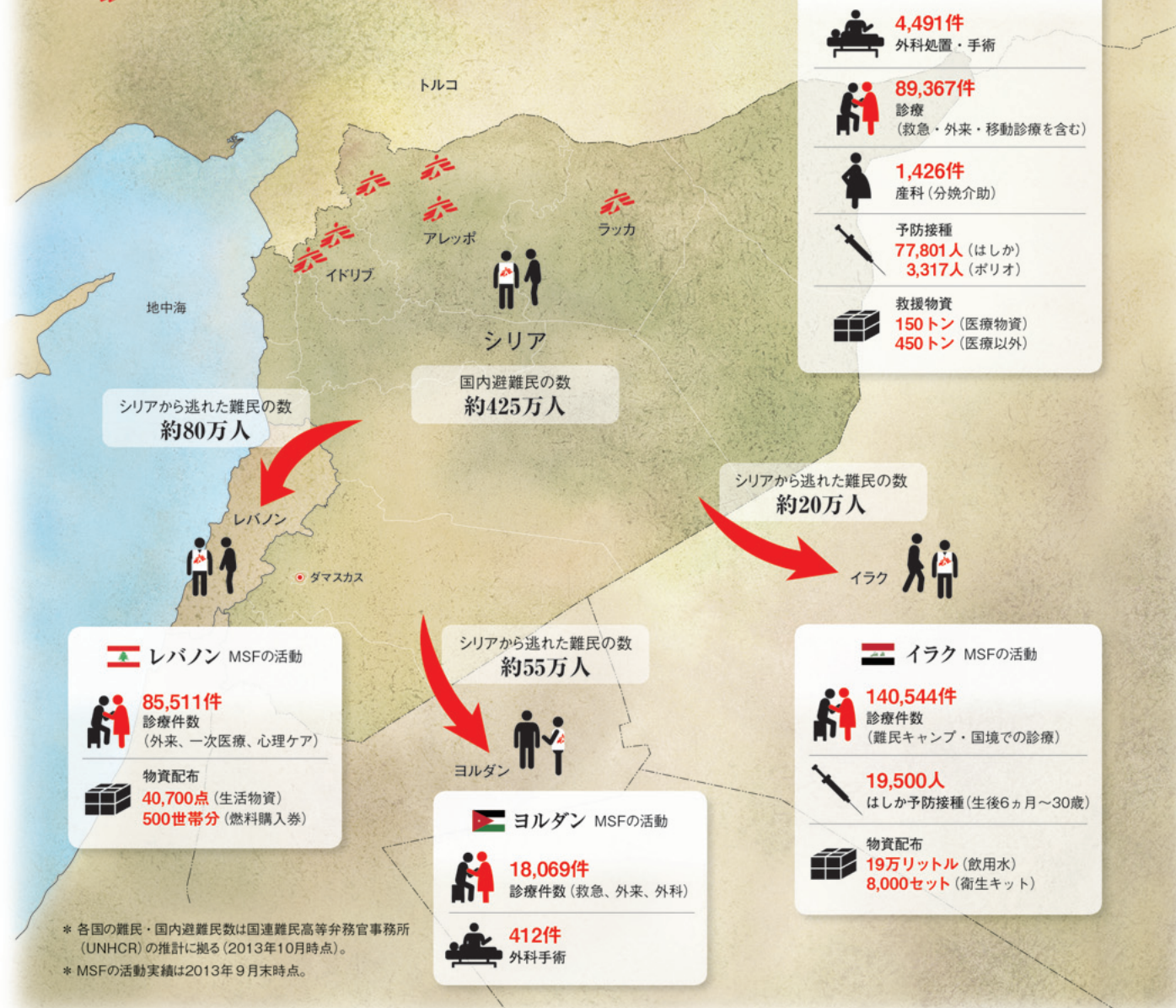
「人道的」で ありつづけるということ。

国境なき医師団(MSF)の活動は、世界が「人道的」であること、つまり国境や立場を超えて人命が尊重されることを望む、そんな人びとの思いによってなりたっています。しかし、国や紛争、政治からの中立を貫こうとしても必要な活動の展開が難しい事態も相次いでいます。シリアでは戦線の狭間におかれた人びとのため活動を拡大する努力を現在も続けています。真に必要な場所に医療・人道援助を届けるため、今後も皆様のお力添えを、どうぞよろしくお願い申し上げます。



シリア国内外でMSFが展開する活動

シリア国内北部6カ所で病院を設置・運営。



戦地に残された人びとに援助を届けて

化学兵器の管理と処理が国際社会の議論の焦点になる中、空爆や銃撃が続くシリアではさらに多くの命が、援助が届かないという理由で危機にさらされています。国境なき医師団 (MSF) は活動拡大に努めながら、人道援助が阻まれる状況の打開を呼びかけています。

COUNTRY DATA

2011年3月から拡大した反政府運動の制圧が内戦へと発展。民間人も巻き込む戦闘により約10万人が死亡、約425万人の国内避難民と200万人以上の難民も過酷な環境にある。北部地域の一部を反政府勢力が掌握し、政府軍との攻防が続く中、外国の武装勢力も参入、終息の糸口は見えない。

取り残された人びとの苦難

「人道援助を優先事項に」。シリア内戦の打開策が主要な議題となった9月の国連総会の機会に、MSFはこのメッセージを強調しました。国内で活動する医療・人道援助団体としてMSFが目にあたりにする人びとの苦難は、軍事行動や化学兵器の管理だけでは解決できないからです。民間人も攻撃の対象になる中、人びとは医療を受けるために移動することすらためらい、医療従事者も殺害、逮捕、拷問、脅迫などに直面しています。かつては高度な医療制度があったシリアですが、医療人材は枯渇し、また自国の製薬業は崩壊、国際制裁の影響もあって、医薬品も絶対的に不足しています。

その結果、シリア国内に残る多くの人が、紛争による負傷だけでなく、糖尿病や高血圧症など本来なら予防や治療が可能な慢性疾患で命を落とし、はしかなど従来は制圧されていた感染症が各地で再発生しています。妊産婦が救急産科医療を受けられる場はほとんどありません。

シリア国内での人道援助活動は依然として大きく制限されています。命にかかわる医療を届けるため、紛争当事者や関係各国政府のすべてが、援助活動の制限を取り除くよう、動く必要があるのです。

制約の中で最善を尽くす

MSFはシリア国内で活動する数少ない援助団体の一つですが、活動が制限されているのも事実であり、医療を届ける工夫を重ねてきました。病院を直接運営できる地域は限られているため、現地の医療施設を支援するネットワークを広げ、病院28カ所と診療所56カ所に技術支援を提供。さらにほかの医療施設にも、不足する医療物資を寄贈しています。MSFの病院の一つで活動するステイプ・ルービン外科医は、現地の状況をこう語りました。

「他の病院が行っているのは、戦傷治療です。この施設だけが、その他の傷病を抱えた患者を受け入れられる唯一の選択肢なのです」

地域の基幹病院へ向かう道が内戦の最前線になり住民がたどりつけないため、MSFは養鶏場だった場所に仮設病院を立ち上げ、外科手術から慢性疾患の治療まで、さまざまな医療を提供しています。

ルービン医師はこう述べています。「私たちの手術室は空気で膨らますテント (P.2-3写真) です。必要なものがすべてそろっているわけではないけれど、手持ちのもので最善を尽くそうと、自らの言い聞かせています。そして、できるだけ多くの命を救うのだと」

Web シリアに関する活動の最新情報はこちらからご覧いただけます。▶ www.msf.or.jp/news/syria.html

HIVから子どもを守れ

国境なき医師団(MSF)はスワジランド政府からの要請を受けて、2007年からHIV/エイズ対策に取り組んでいます。今年2月からは新対策を導入。従来よりも、より積極的・先進的な、その活動プログラムについて、ご紹介します。

HIV感染率が世界一高い国、スワジランド。15歳から49歳の4人に1人、妊婦では5人に2人がHIV陽性*です。

* 2013年3月 国連

「母子感染予防オプションB+」でHIVフリーの社会をめざして

新対策 PMTCT B+

PMTCTは「母子感染予防」を表す英語 Prevention of Mother To Child Transmissionの略称。

従来の対策との違い

HIV陽性なら、**免疫力の程度に関係なく、すぐに 一生の治療を開始。**

対象者

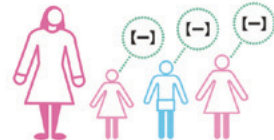


HIV陽性の妊婦と授乳期の母親

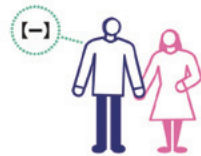


抗レトロウイルス薬(ARV)治療

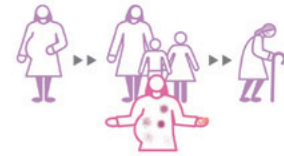
PMTCT B+の効果



将来妊娠した場合も、子どもをHIV感染から守ります。



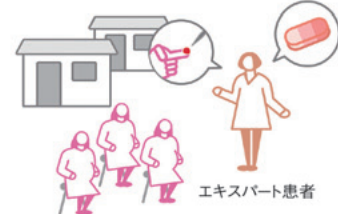
HIV陰性のパートナーをHIV感染から守ります。



ひよみ 日和見感染症を発症するリスクを低下させ、HIV陽性の母親が長生きできます。

課題と対策

HIV/エイズの理解不足と偏見・差別



エキスパート患者

地域連携型活動で市民に働きかけ

患者や現地医療従事者、地域のリーダー、伝統療法士、MSF支援教育カウンセリングチームが連携して、市民にHIV/エイズを説明し、検査・治療を働きかけ。自らもエイズ患者で治療を続けるエキスパート患者は、特に証人として重要な役割を担います。

PMTCT B+はHIV感染のないスワジランドへの第一歩

地域の医療施設への治療分散化や、PMTCT B+の普及・運用・効果の検証を通して、治療を全国に拡大、HIV感染のない世代の誕生をめざします。



特設サイトをご覧ください www.msf.or.jp/swaziland2013

スワジランドのHIV/エイズ対策をアニメーションやドキュメンタリー映像、フォトギャラリーでお伝えする特設サイトを公開中です。MSF日本事務局が企画・取材制作を担当しています。家族に支えられながら治療を続ける患者さんや、一丸となって活動するスタッフの姿をぜひご覧ください。

MSF日本・広報部 谷口(右)
写真家 奥野(左)



- 「この証明書は、私がXDR-TBを完治し、打ち勝ったことの証です」
- 強い副作用を伴うこれらの錠剤を毎日20錠以上飲んでた。フメザさんは「こいつら」と呼んでいた。



＜写真＞すべて©Sydelle Willow Smith

超薬剤耐性結核に打ち勝って

この日、一人の女性が流した涙は、薬剤耐性結核と向き合う多くの人の希望と励みになりました。国境なき医師団(MSF)の治療プログラムで病を克服したフメザさんの喜びの声ををご紹介します。



「この日が来るとは思っていませんでした。最初は不安でしたが、いつか治るという希望を捨てたことはありません。私は変わりました。以前とは別人です」

南アフリカ共和国のフメザ・ティジュールさん(23歳)はそう言って喜びの涙を流しました。彼女は主要な治療薬が効かない薬剤耐性結核の中でも最も深刻といわれる超薬剤耐性結核の患者でした。2年間に及ぶMSFの治療プログラムを受け、「病に勝つ」ことができたのです。

結核は過去の病などではありません。世界人口の3分の1が感染している深刻な病です。中でも最近問題になっている薬剤耐性結核は、最長2年、吐き気や痛み、難聴などの強い副作用を伴う治療が必要です。フメザさんが2年間で服用した治療薬は計2万錠、彼女も聴覚に障害を来してしまいました。しかも、そのようにつらい治療に耐えることができたとしても治療率は5割、彼女の罹患していた超薬剤耐性結核に至ってはわずか2割以下です。

患者にとって一刻の猶予もならない状況にもかかわらず、現地の病院で使用されている薬剤耐性結核の診断方法には長い時間を要します。フメザさんも誤診と待機の末、診断が

「同じ病気の人の励みになれると思います。がんばりました」という彼女の治癒は、治療を受けている人たちにとって大きな励みと希望です。フメザさんの現在の夢は、大学に再び入り直し、保健医療の分野に進むことです。MSFは、彼女の後に一人でも多くの人が続くことができるよう、今後も結核の治療活動に取り組む一方、より効果が早く短期に治療できる薬の開発と、診断方法の改良を強く求め、政府機関や製薬業界へ働きかけを続けていきます。

世界中から「おめでとう」

フメザさん完治のニュースに、MSF運営のブログ「TB & ME(結核と私)」やMSF日本のfacebookに多くのお祝いメッセージが寄せられました。

私たち医師にとってもうれしいニュースです。TB患者にとって大きな希望となります。フメザ、おめでとう!

◎ Dr. Nabil

飲まれた薬の量を考えると、それを飲むことすら重荷かと…… 負けないで克服された強い精神力を思います。ほんとによかった。

◎ 奥村 紀呂子

よくがんばったね! あなたとご家族、治療チームに信頼と愛の力を再認識させてもらいました!

◎ Denise Keniry

「XDR-TB CAN BE CURED(超薬剤耐性結核は治せる)」と書かれた風船をお祝い飛ばした。

“技術の高い産婦人科医になりたいくて、この病院に来ました。治療技術や患者さんへの接し方などいろいろ学ぶことができて、毎日が充実しています。”

ナギーン／
パキスタン人研修医



“ここで出産した友達にきれいで安心な病院だからと勧められて来院しました。無事に元気な赤ちゃんを産むことができましたし、病院のスタッフの対応が丁寧でよかったです。”

女兒を出産した母親



安全なお産を支える“女性の病院”

紛争による避難や貧困によって適切な医療が受けられない妊産婦に、無償で専門的な産科ケアを提供するためにMSFが設立した病院。



“責任の重い仕事で逃げ出したくなることもあります。患者さんからの感謝の言葉と、私をここに送り出してくれた人たち、資金を支えてくれる皆さんの存在を励みにがんばっています。”

吉田照美／看護師



“外国人に会うのは初めてだったけど、お医者さんは僕にもおまのサッカーボールをくれたりして、とても優しいです。将来、日本にも行ってみたいです。”

背中に刺傷を負って治療中の少年（15歳）



紛争地域で緊急医療を提供

爆弾や銃による攻撃が頻発する国境地域で、公立の地域拠点病院をサポート。外科や救急部門（ER）を中心に、多くの負傷者が運び込まれる有事の対応にも備える。

“MSFはここで貧しい人々を支えているので、家族にも誇りにできる仕事です。日本から来るお医者さんたちは面白くていい人が多いです！楽しく一緒に仕事をしています。”

サニー／外科病棟ヘルパー



“MSFの警備員の仕事をしながら勉強して、看護師になることができました！MSFは私に将来の夢と家族（妻子）をくれた恩人です。”

ナシール／パキスタン人看護師



パキスタン

スラムの人びとのための診療所

大都市の一隅でごみで埋め立てた区域に移民や国内の避難民が暮らすスラムに診療所を開設。現地NGOと連携して基礎医療の普及に取り組む。保健教育や心理ケアも提供。

“パシュトゥン語やベンガリ語など、さまざまな言葉話す多文化のチームで教育活動をしています。衛生や栄養のこと、母子保健の大切さなど、教材を工夫しながら伝える、やりがいのある仕事です。”

モナ／
パキスタン人保健教育スタッフ



“遠くまで出かけるのは危険な地域なので、診療所ができてとてもうれしいです。夜も開いていて心強いです。いろんな国の人がいる団体と聞いていましたが、女性の受診にも配慮されていて安心できると感じました。”

産後検診を受けにきた女性



カラチ

“このスラムで生まれ育ち、貧しい人びとに安全で適切な医療を提供することが、子どもの頃からの夢でした。この診療所は住民から信頼を得て、感謝されていることを日々実感しています。”

ヌーザダ／
パキスタン人救急医



「現地から日本の皆さんへのメッセージです」

この8月から9月にかけて、国境なき医師団（MSF）が活動するパキスタンの病院のうち3ヵ所取材で訪問しました。パキスタンは各地で頻発する戦闘や暴力の影響で多くの人が苦しむ国ですが、現地で出会ったのは、たくさんの笑顔でした。治療を受けられたことを喜ぶ患者さん、医療活動に熱心に取り組む国際色豊かなチーム……そして、“日本が大好き”、“支援への感謝を伝えてほしい”という多くの声。ぜひ皆さんに、このメッセージをお届けしたいと思います。

MSF日本・広報部 金杉 詩子



2014年

1月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

2月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28

3月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

4月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

5月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

6月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30



MSFが運営する
病棟で、朝の回
診の様子。



診療の合同、時間
を見つけて現地ス
タッフに講義を行う。



予防接種に並ぶ
難民キャンプの
母と子の列。

難民キャンプの栄養治療

南スーダンのイダ難民キャンプで、国境なき医師団（MSF）は外来、病棟、栄養治療の医療活動を行っています。紛争を逃れてきた約7万人のスーダン人難民が暮らすこのキャンプでは、昨年の雨季には、急激な人口増加による衛生環境の悪化や、栄養不良から、多くの人が命を落しました。MSFの診療所にも対応能力を超える数の患者さんが来たとあります。私は雨季が始まりかけた今年5月に現地に入りました。

主に担当したのは栄養プログラムです。栄養失調の子どもに栄養治療食や栄養を強化したミルクを母乳に加えて使用し、体重増加を図ります。キャンプ内に栄養失調の子どもは多く、特にほかの病気がある子や、食が細く食事に時間がかかる子などは大勢いる子どもの世話で忙しい母親が時間をかけられず、次第に栄養失調に陥ってしまうこともありまし

難民より劣悪な生活

さらに課題となっていたのは、難民よりも地域住民のおかれる劣悪な

長く続く紛争が日常に

MSFでの活動の重要な要素の一つにスタッフ教育があります。私たち外国人スタッフが在る期間は長くても1年。提供する医療の水準を保ち、向上していくには現地スタッフの教育が必要不可欠なのです。ただし、今回は、現地の教育水準が問題でした。MSFは生活の自立促進のためもあり、難民を多く雇用します。看護師は専門の教育を受けて病院で働いた経験もある人たちが、ミルクの配布や身体計測にあ

●イダ難民キャンプってどんなところ？

計40年近くに及んだ内戦を経て2011年に南スーダンはスーダンから分離独立しましたが、いまなお国境周辺では油田を巡って戦闘が絶えません。イダと国境の間は12kmしか離れておらず、キャンプのすぐ北側は反政府勢力の支配地域です。活動中に近くで空爆があり、スタッフは防空壕（といってもシンプルな洞穴ですが）に短時間避難しましたが、難民たちは慣れっこのか「これぐらいで怖がり過ぎだよ」と笑っていました。



**医療も教育も足りない……。
難民キャンプで出会った人びとに
紛争が落とす影**



小児科医
小林 さより
Sayori Kobayashi

小児科医／公衆衛生修士。
武蔵野赤十字病院で初期臨床研修後、都立府中病院などで小児科を研修。2011年よりMSFで活動を開始し、東日本大震災緊急援助、ケニアのスラムでの結核治療、パキスタンでの小児医療・洪水後の緊急援助に参加。

状況です。難民には国連が食糧を配給し、ほかのNGOが水やトイレを提供していますが、キャンプの外にはそうした支援はありません。南スーダンでは長年の紛争の影響で、国全体の生活条件が整わず、医療も十分受けられないのが現状です。私が診た重度の栄養失調のケースも大半は地元の子どもので、診療に来たものの手遅れで亡くなる子もいました。MSFは活動の対象を地域社会にも拡大することを検討しています。

たる看護助手は、計算など基本的な教育も欠けていることがありました。たとえば身長計測で62・7cmと62・9cmのどちらが大きいかわからないことも。「戦争のために通学を続けられなかった」と話す人が多く、大勢の子どもがきちんと学校教育を受けられなかったことを実感しました。

不発弾の破片で顔面や腕に重傷を負った10歳の男の子が運ばれてきたこともありまし。兄弟に聞くと不発弾は家の周りにたくさんあってよく遊んでいると言うのです。紛争が日常の一部になってしまっている、そんな現地の状況が1日も早く変わることを願ってやみません。



1991 武装勢力が大統領を追放、ソマリアは無政府状態に。多くの援助団体が撤退する中、MSFは現地に戻る。

1995 国連PKOおよび米国主導の多国籍軍、撤退。

2005 暫定連邦政府（TFG）成立。

2008 キスマヨでMSF襲撃、外国人スタッフ撤退で遠隔運営に。武装勢力の一部が停戦協定署名（ジブチ合意）。

2011 大干ばつにより飢饉被害、難民が急増。MSFは外国人スタッフも戻り活動拡大に努めるが、10月にケニアで拉致、12月にモガディシオで殺害事件が起きる。

2012 ソマリア新暫定憲法採択。大統領選出、新内閣発足。

2013 MSF、全活動の引き上げを決定。

残るニーズ、患者たちの声

今年3月にMSFが発表した報告書「Hear My Voice」から

干ばつと戦闘から避難しましたが、キャンプの周囲は危険です。8歳の娘が薪拾い中に強姦されてしまいました。
(38歳・女性)

飢餓と治安悪化は政治の問題で、状況は良くなると言われましたが、私たち一般人の目には何も改善されていません。
(24歳・男性)

貧しくて行ける病院も病気の知識がありません。先週、息子を栄養失調で亡くしましたが、十分太っていると思っていたのです。
(24歳・女性)

暴力の容認が決定的打撃に

2013年8月15日、MSFはソマリアで行ってきた活動をすべて引き上げることを発表しました。

過去22年間、無政府状態のソマリアで、MSFは、各地の武装勢力や指導者など全勢力と交渉し、難しい判断を重ねて活動を続けてきました。患者とスタッフの安全を守るため武装警護で活動を守るという例外的措置を採らざるを得なかった国でもあります。

しかし、2011年10月にケニアの難民キャンプでスタッフ2人が拉致され、ソマリアで1年9ヵ月にわたって拘束されることになりました。同年12月にはモガディシオで活動していた2人が銃撃されて死亡。MSFは活動開始以来、計16人を殺害により失いました。さらに、現地の交渉相手である各勢力がこうした暴力を容認する姿勢であることから、この重い決断に至ったのです。

その影響を受けるのは、MSFが月5万件もの診療を提供してきた患者一人ひとりです。現地で活動責任者を務めていたサルハ・イツソーフ医師はこう述べています。

「長年の紛争による現地の医療ニーズは甚大です。人びとに医療を提供できる公立の病院はないのです」

この国を、人びとを置いて去ることとはMSFの歴史上、最も苦しい決断の一つでした。現地で医療・人道活動の保護と安全が確保され、再び戻れる日が来ることをMSFは強く望みます。



フィールド・ストーリーズ

人道援助の現場で出会った人びとの交流、明日への活力源となった出来事など。
国境なき医師団 (MSF) のフィールドでの活動中に、スタッフが出会ったストーリー。



活動立ち上げという貴重な経験

松本卓朗 | ロジスティシャン
Takuro Matsumoto | ラオス

今回は単身で現地に入りプログラムの立ち上げに携わるという活動でしたが、想像以上に時間のかかる任務になりました。オフィスやスタッフの住居、車両の用意、すべてを手配するからというだけではありません。地元住民、行政、現地病院スタッフに、MSFとは何かを知ってもらい、信頼関係を築かなければならなかったからです。

これまで派遣されたプログラムは開始から数年、時には十数年たっていることもあり、地域ではMSFはよく知られていて、私もMSFの一員としてすぐに受け入れられました。しかし、今回はMSFが初めて入る地域で何事もゼロから築き上げるという難しい活動。毎日の挨拶から始まり、ともに食事をし、時にはお酒を酌み交わし、地元の人の話に耳を傾ける。話題はラオスの今日の経済発展から、ベトナム戦争の時代の実被害まで、ベトナム国境に近い村だったこともあり、いろいろ教えられました。現地の若者とも、家族や友人、恋人のこと、文化や将来のことなど、さまざまな話がありました。

9ヵ月が過ぎ、医療スタッフも迎えて医療活動が少しずつ始まったのを見届けて帰国しました。プログラムが本格的に始まる前だからこそ現地の人たちとじっくり話す機会がもてたこと、そして、人対人の相互理解と信頼関係の上に人道援助活動が成り立つことを改めて実感することになった任務でした。



現地政府との覚書調印にこぎつけ、活動が本格的に開始。



車座での食事はじっくりと話ができる機会。(写真左端が筆者)



戦地でのうれしい再会

白川優子 | 看護師
Yuko Shirakawa | シリア

激しい内戦のため、死や別れが日常になってしまったようなシリアでは、悲しくやるせない出来事、患者さんや現地スタッフのつらい経験を、たくさん目にし、耳にしました。

そんな中で、時にはうれしい驚きにも出会います。ある患者さんは、爆発で真っ黒になって運ばれてきました。もう亡くなっているかとも思いましたが、息がありました。全身にひどいやけど、両手は数本の指を失くし、両足にも重傷を負って、傷の感染もひどい状態でしたが、手術を繰り返しながら長期入院し、私がいったん帰国した後に退院したと聞きました。

半年以上たったある日、その患者さんが、突然姿を現したのです。顔の皮膚はすっかりきれいになり、髪もひげもちゃんと生え、しかもちゃんと歩いていたので初めはだれだか全くわからなかったのですが、向こうから満面の笑顔で「YUKO!」と声をかけてくれて、やっと思い出しました。

彼は私がいた間だけでも何回手術を受けたかわかりません。もう歩けないかもしれないというくらい重傷で、精神的にも落ち込んでいたのです。その彼が笑って歩いているなんて、本当に信じられない！ でも本当にうれしい！ 入院中にお見舞いに来ていた彼の友達も私のことを覚えていてくれて、皆で再会を喜び合いました。



昨秋と今年の夏、計6ヵ月にわたってシリアで外傷治療にあたった。



普通の人びとの暮らしが紛争で破壊されてしまっているシリア。



1 MSFの診療所で、診察を待つ多くの患者たち。
2 やぶ地に隠れる人びとのための移動診療。
3 銃撃され村から逃げた妊婦(右)は、胎児が動かなくなったため診察を受けにきた。

紛争から逃れて 9万人が消息不明に

紛争激化のため、ジョングレイ州ビボール郡の住民がやぶ地への避難を余儀なくされたのは今年5月。
国境なき医師団 (MSF) は所在のわからない住民を探し、医療を届けました。



COUNTRY DATA

計40年近くに及ぶ内戦を経た後、2011年7月に独立を果たすも、各地で続く武力衝突、民族間対立、内戦で生じた難民、国内避難民の帰還、国民の基礎生活環境の改善など問題は山積。MSFは現南スーダンで約30年にわたり活動している。2012年には13万件以上の診療を行った。

9万人が消息不明に

今年5月、南スーダンのジョングレイ州で政府軍と武装民兵組織の戦闘が勃発。この地域で周期的に激化する民族間抗争と相まって紛争の中心となったビボール郡のほぼ全域の住民が避難を余儀なくされました。同郡の推計人口は14万8000人。そのうち、8月末の時点で安否が確認されたのは、周辺国と首都に避難した人と、近隣の村に滞在していた5万8000人のみ。残る約9万人の人びとがその消息さえつかめない状況でした。

避難した人びとは身一つで、ハイエナ、ライオンが潜む、昼間でさえ何が起るか予測できないやぶの中に逃げ込まざるを得ませんでした。中には3日間、たった一人で沼地に身を潜めていた3、4歳の子どものもいました。そのような状況に雨季の到来が追い打ちをかけました。マラリアなど感染症が流行し、人びとをとりまく環境はさらに劣悪になったのです。

ヘリコプターで移動診療

MSFが運営する病院も攻撃を受けました。そのためにビボール郡で唯一の医療施設となったグムルクの診療所にテント式の手術室を設置し、負傷者や孤立した人びとの治療にあたりました。ヘリコプターを使った移動診療も行いました。「ローマ時代のように使者にメッセージを託し、MSFのことを伝えてもらうのです。すぐに何百人もの患者が集まってきます」。移動診療の様子をMSFの看護師はそうのように話しています。集まってきた人の中で優先順位を決め、感染症の重症者、栄養失調の子ども、感染症の妊婦など100人以上を毎日診察しました。

日本の3分の1の広さがある同州に身を潜めている人を見つければ容易ではありません。数万人の命が脅かされる中、MSFはヘリコプターで徹底的な捜索を行う一方、他団体にも食糧、住居、浄水装置などの提供を呼びかけました。

建国から2年を経た南スーダンは、いまま安定や復興からは遠い状況です。命の危機にさらされる人びとに援助を届けるMSFの活動は各地で続いています。

国境なき医師団日本の新しいウェブサイト、ぜひご覧ください。

スマートフォンやタブレット端末からも直接ご覧いただけます。

www.msf.or.jp



マイページ

ログイン ボタンから入れます。

すでにIDのある方はこれまでと同じIDで、IDのない方は新規登録して、ご覧いただけます。

MSFの活動を支える寄付を、さらに身近に、続けていただくために……

皆様の「マイページ」をご用意しました。



あなたの寄付でできたこと

今までの寄付に相当する援助の例をご覧いただけます。



あなたの寄付の一覧

今までの寄付の内容をご覧いただけます。



「毎月の寄付」の確認/変更

「毎月の寄付」契約内容の確認と変更ができます。



ご登録情報の確認/変更

ご登録住所等の情報の確認と変更ができます。

寄付金控除のご案内

国境なき医師団（認定NPO法人）への寄付は、所得税、法人税、相続税、一部の自治体の住民税について、税制上の優遇措置の対象となっております。

●個人による寄付 ①か②のいずれか有利な方を選択できます。詳しくは最寄りの税務署にお尋ねください。

①所得控除 下記の計算式による金額が所得から控除されます。

$(\text{寄付金合計}^{\ast 1} - 2000\text{円}) \times \text{所得税率}^{\ast 2} = \text{寄付金控除額}$

※1 所得額の40%が上限。

※2 所得税率は課税所得により異なります(5%～40%)。

②税額控除 下記の計算式による金額が所得税額から控除されます。

$(\text{寄付金合計}^{\ast 1} - 2000\text{円}) \times 40\% = \text{寄付金控除額}^{\ast 2}$

※1 所得額の40%が上限。

※2 所得税額の25%が上限。

控除を受けるには確定申告が必要となります。年末調整では申告できませんので、ご注意ください。
住民税については自治体へお問い合わせください。

●法人による寄付 国境なき医師団への寄付は、一般の寄付金の損金算入限度額とは別に、下記の特別損金算入限度額の範囲内で損金に算入できます。詳しくは最寄りの税務署にお尋ねください。

$(\text{資本金等の額} \times \frac{\text{当期の月数}}{12} \times 0.375\% + \text{所得の金額} \times 6.25\%) \div 2 = \text{特別損金算入限度額}$

税制改正により、特別損金算入限度額が拡大しました。(注)新規料率は平成24年(2012年)4月1日以降開始の事業年度から適用となります。改正前の料率は0.375%を0.25%、6.25%を5%と読み替えてください。

寄付に関する詳しい情報はこちらから

Tel 0120-999-199

(通話料無料、9:00～19:00/無休)

Web www.msf.or.jp

携帯サイト www.msf.or.jp/mb/

右のQRコードからもアクセスいただけます。



支援者の声

国境なき医師団(MSF)日本の事務局には、支援者の皆様から日々、さまざまなメッセージが届いています。皆様が活動に関心をお寄せくださっていることが、私たちスタッフにとって何よりも大きな励みです。ご本人から掲載の了解をいただいたお便りを、ここにいくつかご紹介します。

✉ 京都府 匿名希望の男性(40代)からのメール

『REACT』を読むと、心に突き刺さるものを感じます。

毎日平和に暮らし、日頃ささいなことに不満を感じる自分が、どんなに恵まれているかに気づかれます。衣食住さえ満足に手に入らない暮らしをしている人がこんなにたくさんいるということに驚かされ、その現実にはショックを受けています。

なんとなく始めた寄付ですが、定期的に届く『REACT』を読んで初めて知ったことがたくさんあり、行動することの大切さ、関心をもつことの意味など、いつもいろいろと考えさせられています。

関心をもつこと。まずそれがすべての始まりだと思います。『REACT』の財務報告のページを見て、支援者が思ったよりたくさんいること、寄付の年間収入が総額で46億円になることなど、初めて知りました。私の月々の支援が、活動を支える力として、少しは役に立っているのかと思うと励みになります。ずっと支援を続けられるように仕事をがんばろうと思いました。ショックな内容の記事も目を背けずに読み、現実を知ること、関心をもつことが、いまの自分にできることだと思っています。



✉ 千葉県 石毛美江様(40代)からのお手紙

平穏な日々にも辛いことはありますが、『REACT』には「命」を保障されぬ人びと、私が考える「あたり前」と全くかけ離れた毎日を生きている人びとのことが書かれています。同じ年ぐらいの女性であったり、2歳の女の子であったり……記事を読んで、冷水を浴びたような思いでした。

考え、行動しなければ、恵まれた国に生まれ育った意味がない！と強く思っています。

いただきましたお言葉に恥じないように、スタッフ一同、これからも真摯に活動を続けてまいります。お便り、ありがとうございました。

事務局より

ケニアで拉致された2名が解放されました

今年7月19日、2011年10月にケニアのダダーブ難民キャンプで国境なき医師団(MSF)のスタッフとして活動中に拉致され、ソマリアで拘束されていたモンツェラット・セーラ(写真左)とブランカ・ティエボー(同右)が解放されたといううれしいニュースが届きました。2人は故郷のスペインに無事帰国を果たし、健康状態も良好。家族のもとへ帰ることができる喜びを語ったとのことです。MSFは今後も、2人と家族に対するサポートを継続していきます。

2人が戻るまでの1年9ヵ月間、日本の皆様からも無事の解放を望む多くのメッセージをいただきました。2人を気遣う気持ちを日本からも届けていただいたこと、あらためて深く感謝申し上げます。

